



鳴門教育大学

名誉教授 西園 芳 信



兵庫教育大学

教授 福本 謹 一

芸術系教育連合講座における教育実践学の歩みと展望—音楽科教育実践学—

教育の主たる目的は、教育の実践を通して児童・生徒の人間の成長と発達を助成するところにある。従って、教育は実践に生命がある。この場合、教育に関する理論は実践に組み込まれ実践に生かされるものでなければならない。ところが、伝統的な教育学や教科教育学は、この理論と実践が二元論的に分離され、必ずしも教育現場の教育実践を質的に改善するものになっていなかった。このような反省に立ち教育の理論と実践の統合を目指す教育に関する新しい学問領域として「教育実践学」が誕生した。

芸術系教育連合講座における音楽科教育実践学の研究においては、「教育実践学」の理念である教育の理論と実践の統合を目指す研究の実現のため、次のような授業科目と博士学位論文によって展開された。1. 授業科目 (1) 総合共通科目：教育実践基礎研究ⅠⅡ, (2) 専門科目, 総合：人間の成長と芸術活動, 原論：音楽教育基礎特別研究, 音楽教育課程特別研究, 内容論：音楽表現と技法, 音楽鑑賞と理論, 方法論：音楽授業特別研究, 音楽教材特別研究, (3) 課題研究：ⅠⅡⅢⅣⅤ。2. 博士学位論文 上記授業科目の (3) 課題研究は、博士の学位論文の構想と完成を目指すものとなる。博士論文の構想と完成においては、教育の理論と実践の統合を目指した教育実践学の研究であることから次のような研究の方法によって展開された。

音楽科教育実践学の研究対象は学校の音楽科の教育実践にある。この教育実践はカリキュラムによって具体化される。さらにこのカリキュラムは哲学（美学・音楽学・教育学）や心理学等の基礎理論によって導出される。これら研究の三つの視点を構造的に捉えると、第一層実践論的研究, 第二層カリキュラム論的研究, 第三層基礎理論的研究となる。従って、音楽科教育実践学の研究構造としての実践の層（実践論的研究）と理論の層（第二層カリキュラム論的研究, 第三層基礎理論的研究）とが相互作用し発展するとき、音楽科教育の理論と実践の統合が可能となり、教育実践に役立つ博士の研究になる。このような研究方法であることから、音楽科教育実践学の博士論文の研究では、理論研究で完結するのではなく、常に教育実践を含むものとなる。例えば、伝統音楽を指導内容とするカリキュラム開発の研究においても、これを理論研究で終わらせるのではなく、その開発したカリキュラムの理論研究は、教育実践ではどのような学習効果があるのか、実践的検証をすところまでが研究の範囲となる。

以上のような授業科目の履修と博士論文の研究によって、芸術系教育連合講座音楽科の博士学位取得者は、創立から20年間で課程博士14名, 論文博士6名（この内3名は単位取得退学者）合計20名である。そして、学位取得後の就職先は、国立の教員養成大学が8名, 私立の教員養成大学が8名である。学位取得者が教員養成大学における教科教育の教員として専門的な仕事をしており、教育実践学の研究の成果と評価される。

今後の展望としては、音楽科や美術科の教科専門を教科内容学の観点から研究を推進していくことであ

る。教員養成大学の学部においては、免許法の改正で教科専門も教材や教育方法を含んだ授業を展開することが求められており、また修士課程の教科教育は教職大学院に移行することが推進されている。このような教員養成大学における教育環境の変化から、従来の教科専門の教育内容では対応できず、教科専門を教科内容学の観点から捉え直すことが課題となる。この課題に応えるためには、芸術系教育連合講座の博士論文において教科内容学の研究を一層推進するようにすることが求められる。

(西園芳信)

芸術系教育連合講座（美術）における20年の概括とさらなる発展に向けて

1. 創設期の芸術教育実践学構築の動向

兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科の一翼を担う芸術系教育連合講座も20周年を祝うことができることは慶びに堪えない。教育実践学を構築しようとする創設期の試みの中では、「実践に根ざす」教育理論が目指されていたが、実践性自体の表層的な理解への危惧も表明されていた。「実践」が極めて状況論的で、理論を構築する源泉でありながらも今で言う「理論と実践の融合」、すなわち教育の理論と実践の相補的関係性を追求する必要性が認識されていた。

2. 創設10年期における芸術教育の理念系の提示

そうした中で、芸術教育における実践学をどう捉えるかという検討は、当時の西園芳信鳴門教育大学教授(現名誉教授)、辻田嘉邦兵庫教育大学教授(現名誉教授)を中心としてなされている。辻田教授は、芸術教育実践学の確立を目指すにあたり、芸術による人間形成的教育課程論としての原論に根ざす内容論、方法論という図的要素を、子ども理解と社会の諸相への対応という地的背景の中に位置づけて検討することを提起していた。そして、教育課程論については子どもの学びの論理に基づく学習の発達の側面と学習内容の論理の側面を一体化する子どもの学びの論理として探求すること、芸術教育内容論については意味論的観点から模索すること、そして芸術教育方法論については想像力を軸にしてパフォーマンス活動という視点から考究することによって芸術教育の実践論を描出することが重要であると指摘している。創設期の芸術教育実践学を構築しようとする試みは、その後の課程博士の研究指導に色濃く反映された。

平成18年には、連合大学院創設10周年記念事業が行われたが、創設10年を総括する意味で、「教育実践学の構築」が刊行された。これは、モデル論文の分析を通して教育実践学の理念系を提示するという目論見であった。芸術系教育連合講座で取り上げられた2点のモデル論文は、共通して芸術教育の営為に関わる論理と教育実践との関係が有機的であることを示すものであり、芸術教育分野での実践学の構築に貢献した点が評価されている。また、芸術教育実践学に関する展望として、西村俊夫上越教育大学教授(現理事副学長)は、芸術教育における臨床的視点と相互行為分析を中心とした授業プロセス分析を重視することを挙げているが、この視点は、芸術系教育連合講座における研究指導を牽引する考え方となった。

3. 教育実践学コンピテンシーと芸術教育実践学

平成19年度(2007)に連合大学院は、一つの転換点を迎える。教育科学及び教科専門科学の各分野の枠にとらわれず、諸分野を有機的に統合化することなどを視野に入れてさらなる教育実践学の構築を希求する

と同時に、平成20年度以降に設置が予定される教職大学院に対応する高度な研究・指導能力をもつ指導教員の養成を視野に入れた体系的教育課程の編成を目指すものであった。このプログラムでは、D1セミナーの充実、教育実践学フォーラムの多様化、総合共通科目の強化、国際インターンシップを含む国際化対応などの新たな取り組みを行った。特に、教育実践学コンピテンシーの策定を提案したが、この連合大学院が育成する人材像を明確化しようとする試みは、教育分野におけるコンピテンシー論やスタンダード開発が議論され始めていた時期において時宜を得たものであり、我が国の博士課程としては初めての試みであった。この教育実践学コンピテンシーは、芸術系教育連合講座においても従来の芸術理論や芸術教育論に依拠する学術研究以上に芸術教育の実践場面の諸課題をふまえて、教育実践に還元する成果を追究し、個人研究のみならず、他の研究者・実践者と協働した研究の運用能力が問われることになった。

4. 今後の展望

芸術系教育連合講座（美術）は、創立から平成28年度までの課程修了の学位論文の数が24本、論博は3本を数え、芸術教育実践学への貢献には多大なものがあると自負することができる。今後、教職大学院の増加に対応する人材を輩出することができるようキャリア形成を見据えた努力が求められよう。

（福本謹一）